

野田の弥生時代

(のだのやよいじだい)



勢至久保遺跡出土の壺型土器

明治 17 年(1884)、東京本郷区向ヶ丘弥生町の貝塚で、東京大学の坪井正五郎らが薄手の土器を発掘しました。出土地名から大学では「弥生式土器」と呼んでいたようですが、この土器は、明治 29 年(1896)頃でも「貝塚土器ニ似テ薄手ノモノ」という認識でしたが、大正時代に入ると「弥生式土器」という名称が定着します。その後、最初の発掘場所がわからなくなりましたが、昭和 49 年(1974)根津小学校の児童が東大の一角から土器や貝を拾ったことで、弥生式土器発見地と推定され、昭和 51 年(1976)「弥生二丁目遺跡」として史跡指定されました。前の年、最初の土器は重要文化財に指定されています。

「弥生時代」、「弥生文化」とよばれたのは、水稲などの農耕と金属器を使用することで、「縄文文化」と大きく違ったからです。昭和 12 年(1937)、奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡から稲穂束が発見されていましたが、弥生の農耕を具体的に見せたのは、静岡市登呂遺跡でした。第二次世界大戦中の昭和 18 年(1943)、水田下 2m から土器・木器が発見されますが、ここは軍需工場建設の造成工事に入るところでした。調査を行い、木柵につながれた丸木舟などを発掘し、報告書も印刷中でしたが空襲で焼失してしまいました。

戦後、登呂遺跡が再調査され、水田遺構・導水施設・住居などを発掘し、弥生時代の農村風景が明らかになりました。その後、初期の水田が福岡市板付遺跡、唐津市菜畑遺跡、青森県田舎館村垂柳遺跡でも発見されます。金属器として、銅鐸(どうたく)・銅剣(どうけん)・銅矛(どうぼこ)、鉄器(てつき)などが知られ、墳墓(ふんぼ)も墳丘墓(ふんきゅうぼ)、方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)、甕棺(かめかん)をもつ王墓なども明らかになってきました。

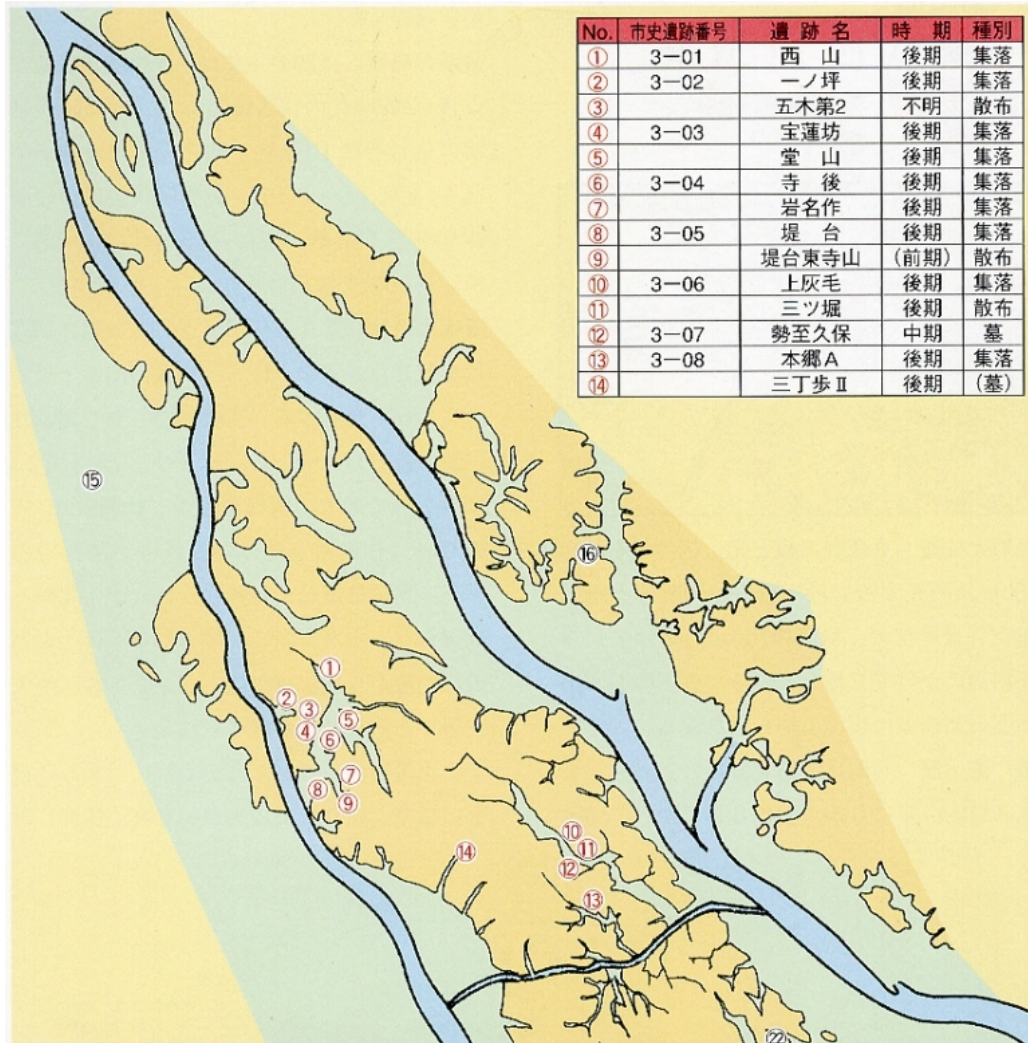
近年、弥生時代遺跡は市域でもようやく発見されるようになってきました。

- 前期(B. C. 4~B. C. 1 頃)：朝鮮半島からの稲作文化・技術などが北部九州に伝わり、短期間で西日本に定着します。市域では遺跡の発見はありません。
- 中期(B. C. 1~A. D. 1 頃)：農耕など生産基盤の強化により大規模な集落が出現し、高地性集落(こうちせいしゅうらく)・環濠集落(かngoしゅうらく)など、紛争に対応する遺跡や王墓的な方形周溝墓もつくられます。東日本にもこの頃から周溝墓が導入され、やがて従来の再葬墓(さいそうぼ)と交替します。市域の勢至久保(せしくぼ)遺跡から再葬墓(方形周溝墓という説も)が発掘されています。再葬墓は埋葬後 2~3 年で掘り出し、遺骨を壺に入れて再葬したものです。ここでは、靱跡の付いた土器片が発見されました。中期の中頃の市域では弥生時代で最も古い遺跡です。
- 後期(A. D. 1~A. D. 3 頃)：全国的に石器から鉄器に変わり普及する時期です。生産性が高まり、土器などに地域性が出て独自色が強まります。市域の遺跡は増加してきます。西の江戸川側、座生川(ざおうがわ)周辺で一ノ坪(いちのつぼ)、宝蓮坊(ほうれんぼう)、寺後(てらご)、西山(にしやま)、堂山(どうやま)遺跡など。東の利根川側では本郷 A(ほんごうえー)、上灰毛(かみはいげ)遺跡などが集落を形成しますが、ともに小規模です。発見された土器は東北南部、栃木、茨城南西部との交流が認められ、野田地方の弥生文化は北関東の影響が強いように思われます。

《詳しくは…》

* 野田市史編さん委員会編 2005『野田市史 資料編 考古』 野田市

弥生時代の主な遺跡



勢至久保遺跡出土
土器の刳圧痕

